The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	死に関する情報を含む映像に接した際の情動変化に関連する要因
Author(s)	尾崎, 勝彦
Citation	生老病死の行動科学. 2005, 10, p. 23-33
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/11301
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

死に関する情報を含む映像に接した際の情動変化に関連する要因

Some factors related to mood change caused by contact with death stimulus

（大阪大学大学院人間科学研究科博士後期課程）　尾　﨑　勝　彦

Abstract

The simplest way of death education would be to show visual images that contain death stimulus to the audience and observe their mood change. The author's previous studies showed that mood change occurred after they had contact with death stimulus. However, factors related to the mood change still remains unknown. In order to indicate these factors, the larger number of participants than that of the previous studies was adopted. Following results were obtained. 1) Negative correlation between the change of subscale of POMS "Depression" and the length of passed years after their first bereavement were found. 2) Two factors were extracted from their quantitative data of their impression about death stimulus ; "Positive attitude toward one's life" and "Hardness and sadness". 3) The latter has negative correlation with the change of "Depression" and positive correlation with the change of "Vigor" (also the subscales of POMS). 4) Positive correlation between these two extracted factors was found.

Key word : experiment, POMS, bereavement, death education, factor analysis

Ⅰ　緒　言

国家や地域間の関係を背景にした殺人、すなわち、戦争やテロから家庭内における殺人まで、対人間の物理的・心理的距離の大小にかかわらず悲惨な事件が連日のように報道される昨今である。いま、この瞬間にも多くの尊い命が不当に奪われているかもしれない。いま一度我々人類は命の尊さ、かけがえのなさを真剣に思い起こす必要に迫られているのではないか。

デス・エデュケーションは、その名称こそ「死の教育」であるが、命の尊さ、かけがえのなさを伝えること、考えさせる態度を養うことを目的とするものである。そして、「教育」という名を冠する限り、その効果を問われ続けるのである。その効果として、たとえば、死の不安や恐怖の軽減をデス・エデュケーション前後におけるそれらの変化を測定した研究が多く報告されている。しかし、これらの示す内容は必ずしも一貫しておらず、死の不安や恐怖がデス・エデュケーションによって軽減したとする報告（e.g., Durlak, 1978 ; Miles, 1980 ; Johansson & Lally, 1990 ; Berman, 1998-99）がある一方で、逆に増加したという報告（Bell, 1975; Combs, 1981; Wittmaier, 1979）もみられる。この状況は、デス・エデュケーションの困難性を表していると同時に、そのプログラム内容の多様性、教育を施す側、および受ける側のパーソナリティや生活履歴の多様性などにより、結果が影響を受けるものと思われる。現在の日本の教育現場でデス・エデュケーションを実施・実行することの困難性を赤澤（2004）は、デス・エデュケーションを実施・実行したことのある教諭のインタビュー分析から、その問題点とともに指摘している。しかし、死は本来恐怖・不安の対象であり、死の不安や恐怖があるのは自然なことである（デーケン，1986）とする立場からすれば、デス・エデュケーションは、死を特化して考えるのではなく、誰にでも必ず訪れる死を通して自分の人生を見直し、生命の大切

さ、自己の存在の唯一性などを考えるきっかけを与える（e.g.; 平山，1985；Hayslip & Cynthia, 1993-94；木村，1990；柏木，2001）ということがその効果であろう。デス・エデュケーションのプログラムは、大別して教示的プログラムと経験的プログラムがあるが、準備する側にも負担がかからず、見る側にも用意が要らない簡単な方法として、映像などの視聴覚教材を提示する方法がある。そしてその効果は、提示前後での視聴者の変化を測定することによって確認することができる。

映像を提示することで起こる視聴者内の変化に関する研究は、暴力映像を用いたものが多い。古典的には、ある条件の下、提示した暴力映像が視聴者の攻撃行動を直接喚起するとされていた（Berkowits & Alioto, 1973；Hartmann, 1969；Huston-Stein, Fox, Greer, Watkins, & Whitaker, 1981；Green & Stoner, 1973；Bandura, Ross, & Ross；1963）。しかし、現在では、さまざまな社会的制約の下、暴力映像が直接視聴者の攻撃行動を促進するのではなく、まず、認知や情動が影響を受け、それが攻撃行動の媒介となるとされている（湯川・吉田；1998, Bushman & Green；1990, Jo & Berkowits；1994, 吉田・湯川；1996）。これらの暴力映像に関する研究結果を、映像提示型のデス・エデュケーションに適用するとすれば、死に関する情報を含む映像を提示し、その前後で視聴者の情動や認知が変化し、それを媒介として命の尊さやかけがえのなさを考えていく態度が養成される、ということになるだろう。しかし、死に関する情報を含む映像を提示する、とはいえ、扱うテーマが「死」であるだけに、視聴者にとっては見たくない場合や、不快に思う場合もあろうことが予想される。しかし、どのような映像をどのような特性や属性を持つ視聴者に提示した場合に、どのような感情や印象を持たれるのか、が系統立てて調査されたという報告はない。この種のデータが存在しないことが、デス・エデュケーションを開始するに当たっての困難性を助長するであろう。

そこで、筆者は、これまで一連の研究において、死に関する映像を提示した場合の視聴者の情動変化とそれに関連する要因の探索を行ってきた（尾﨑；2001, 尾﨑；2003, 尾﨑・荒井；2004）。これまでに得られている結果は以下のとおりである．1）死に関する情報を含む映像を提示したことで、POMS によって測定された情動は、若年層において有意な変化を呈したが、中高年層においては有意な変化が見られなかった（尾﨑；2001）。2）若年層において、映像に対する関心の程度や死別の有無は情動変化との関連は見出せなかった（尾﨑；2003）。3）但し、映像に対する関心が低く、かつ、死別体験もないという対象者は極めて少なく、関心が高いか、または死別体験があるか、のどちらかを満たしていれば、情動変化をきたしやすいという可能性は残っている（尾﨑・荒井2004）。

そこで、本報では、対象者人数をさらに増やし、1）映像提示型のデス・エデュケーションに関する議論の基盤となるようなデータを蓄積すること、2）情動変化に関連する要因をさらに探索すること、そして、3）これまで得られた自由記述の感想をある程度定量的に扱い、映像から受ける印象と対象者特性または情動変化との関連を見ていくこと、の3点を本研究の目的とする。

Ⅱ　実験手続き

1．対象者

専門学校生132名を本研究の対象者とした。そのうち113名（女性66名、男性46名、不明１名 M＝21.04歳、SD＝3.68歳）から有効回答が得られた（有効回答率82.5%）。対象者の所属・学

年は看護専門学校看護学科1年43名、医療専門学校臨床工学科1年22名、保育福祉専門学校介護福祉科２年67名であった。但し、この人数は本研究の中心となる従属変数であるPOMSへの回答が完全な人数を示しており、POMS以外の設問に欠損値が含まれる場合もあるので、それぞれの解析によって対象者人数は異なる。

２．実験日時・場所および状況

実験は前節で示した専門学校の授業の一環として、異なる３専門学校の３学科４クラスで行なわれた。2004年７月22日に１クラス、同年12月15日に２クラス、そして2005年２月１日に１クラスの授業の中で行われた。いずれも各授業科目の分脈の中で死生学をテーマとした授業の１コマとして行われた。実験場所は各専門学校の視聴覚教室である。

３．実験装置・実験課題

＜映像＞死に関する情報を含む映像として前報同様末期がんで死にいたる患者の海外制作ドキュメンタリー番組を用いた。これは、末期がん患者がその病名と予後を宣告されてから死に至るまでの家庭生活を描いたドキュメンタリーである。初老の男性患者は、死を完全に受容していて、妻や訪問ホスピスのスタッフ、友人達との時間を一日一日大切にして生活している姿が淡々と描かれている。プログラムの最後に夫を看取った妻は、「死によって彼が苦悩から解放されたと思う」と語る。自己の死を受容し、良好な家族関係、友人関係の中で死を迎え、また、周囲の人々も死に行くものに対して心限りのケアを与えている、いわゆるgood deathのひとつのあり方が表現されている。オリジナル映像は60分近くの長さのものであるが、ストーリーを崩さぬように注意しながら20分に編集した。映像は、2005年２月１日に行ったクラスのみ教室の都合上27インチのCRTモニターに映し出され、それ以外はスクリーンに108インチの大きさに投影された。映像サイズの影響は認められなかったことが既報（尾崎；2001）にて確認されている。

＜質問紙＞映像提示前後に以下の構成からなる質問紙調査を行なった。

1) 情動尺度POMS（Profile Of Mode States）日本版（横山・荒記，2000）：65項目からなり、「不安－緊張」、「抑うつ－落込」、「怒り－敵意」、「活気」、「疲労」、「混乱」の程度を測定する。これら「活気」以外の５つの得点を加算し、「活気」の得点を減算した「総合」値も検討する。オリジナル版の回答は、「まったくなかった」（０点）－「非常に多くあった」（４点）の５件法であるが、まったくなかった、非常に多くあった、というような過去形の表現から、過去の事実について回答するという印象を与える恐れがあるために、「まったくなかったような気がする」のように「－ような気がする」を回答文に付与した。さらに現在の気持ちを回答させるために、「人の気分はちょっとしたことで変化するといわれています、あなたのいま、現在の気分状態をお尋ねするものです。」という説明文を回答欄の前に与えるとともに口頭で指示した。
2) フェイスシート：年齢、性別、および氏名を記入させた。氏名は倫理的配慮のひとつとして、プライバシー保護のため偽名使用可能なこと、および偽名使用の場合は映像提示前後の２回の質問紙に同じ偽名を用いることが実験者によって口頭で教示された。
3) 関心の程度：対象者が日常鑑賞する映像メディアで、最も関心を持っているもののジャンルを尋ねた。その最も関心の高いジャンルに対する関心の度合いを10として、提示映像の相

対的な関心の度合いを１から10までの数値で回答させた。数値が大きいほど提示した映像に対する関心が高い。なお、この設問は映像提示後の質問紙にのみ掲載した。

4) 死別体験：対象者の死別体験の有無を以下の4段階で尋ねた。数値が小さいほど死別や死を直接的に体験していることになる。また、1. および2. については、差し障りのない範囲で具体的に死別者を回答させた。また、これらの経験の回数を１回のみ、および２回以上しているかどうかについて尋ね、最初の死別体験についての時期を何年ぐらい前かという形で記入させた。

1. 家族や恋人、親友などあなたにとって重要な人の死を看取ったことがある。
2. 家族や恋人、親友などあなたにとって重要な人との死別体験がある。
3. 事故や災害の現場などで死者（遺体）を生で目撃したことがある。
4. 上記１～３のような体験はまったくない。

5) 定量的感想

これまでの調査で得られた自由記述感想は、おおまかに以下の３つに分類された。1）悲しい、つらい、などのネガティブな感情を述べたもの、2）一日一日を大切に生きていこう思う、など人生を前向きに捉えたもの、3）自分のこととしては受け止められない、としたもの、である。そこで、本報ではこれらの自由記述から得られた文言を元に、ネガティブな感情、前向きな姿勢、他人事、の３因子を想定して、15問の設問を作成した。さらに、「死に関する情報」が視聴者に伝わったことを確認することを目的とした、「人はいつか必ず死ぬということを改めて思った」という設問を加えて16問の設問群とし、それぞれについて、あてはまらない（０点）～あてはまる（４点）の５件法で尋ねた。当該設問は映像提示後の質問紙のみに掲載された。

6) 自由記述感想：映像を見た後の感想・意見などを求めた。この設問も同様に映像提示後の質問紙のみに掲載された。

４．実験の手続き

実験者が対象者に同意書を配布し、実験手順の説明を口頭により行い、実験に対する同意を求めた。同意書の記入・提出をもって実験に対する同意が行われたものとした。なお、同意書には、実験手順の説明と共に、実験参加・不参加の自由、同意後の実験遂行放棄の自由に関する事項が含まれ、当該事項についてはさらに口頭による説明がなされた。具体的には、「死」をテーマとする映像内容であるために、場合によっては、見るに耐え難い印象を与えるかもしれないこと、そのような場合には、退席可能なことと、退席した場合でも出席扱いとし、成績に影響しないことなど、倫理的な配慮を行った。同意書記入後、実験者が同意書を回収すると同時に１回目の質問紙を配布し、記入させた。対象者の記入終了を見計らって実験者が誤記入のないことを確認することを口頭で求めた後、質問紙が回収された。次に、実験者は映像提示の開始を宣言し、映像を提示した。映像プログラム終了後、実験者が映像提示終了を宣言し、２回目の質問紙を配布した。１回目と同様実験者が誤記入のないことを確認することを口頭で求めた後、質問紙が回収された。その後、実験者は対象者に対して、実験の全過程終了を宣言し、実験協力に対する感謝の言葉を述べ、実験の意図を説明した。また、保育福祉専門学校では、２クラスに試行を行ったため、先に行ったクラスの対象者に、次に行うクラスの対象者に実験内容を伝えないように口頭で注意を与えた。

5．分　析

分散分析、および相関分析をSPSS9.0J for Windows（SPSS. Inc., 1999）を用いて行った。因子分析はSEFA（Kano & Harada, 2000）を用いて行った。

Ⅲ　結果

1．映像提示前後のPOMS値の変化

Table 1に映像提示前後のPOMS値、およびt値を示す。POMSの全ての下位尺度、および総合値において1%以下の有意確率で低下した。

Table1. 映像提示前後の各POMS値の変化(n=113)

項目	*M/SD*	提示前	提示後	t値
緊張-不安	*M*	14.81	12.44	5.281***
	SD	6.71	6.44	
抑うつ-落込	*M*	18.36	16.52	2.764**
	SD	10.99	10.86	
怒り-敵意	*M*	14.56	9.96	8.634***
	SD	9.89	10.00	
活気	*M*	13.04	10.12	6.339***
	SD	6.38	6.69	
疲労	*M*	12.96	10.47	5.211***
	SD	7.01	6.95	
混乱	*M*	12.78	10.81	5.886***
	SD	5.49	5.17	
総合	*M*	60.42	50.07	5.305***
	SD	35.28	33.46	

** $p<.01$　*** $p<.001$

2．映像に対する関心の高さ、死別体験の分布

映像に対する関心の高さは、$M=7.49$、$SD=2.26$であった。Table 2には、死別体験の分布表を示す。若年層にも拘わらず、重要な他者との看取りのある死別体験のある者が24.5%、看取りのない死別体験のある者が42.7%を占めた。以降、これらの対象者を死別体験あり群(n=74）とする。当該群のうち、複数回の体験をしているものは、その6割以上に及んだ。また、同Tableには最初に体験した死別の時期(～年前)も同時に示した。死別した重要な他者はその多くが祖父母であった。

Table2　死別体験の分布

区　　分	人数(%)	回数(%)	時期
1.家族や恋人、親友などあなたにとって重要な人の死を看取ったことがある	27(24.5)	1回のみ;27(36.5) 2回以上;47(63.5)	$n=74$ $M=7.73$ $SD=5.46$
2.家族や恋人、親友などあなたにとって重要な人との死別体験がある	47(42.7)		
死別体験「あり」小計	74(67.2)		
3.事故や災害の現場などで死者(遺体)を生で目撃したことがある	3(2.7)	—	—
4.上記1～3のような体験はまったくない	33(30.0)	—	—
死別体験「なし」小計	36(32.7)	—	—
計	110(100)		

映像に対する関心の高さを死別体験あり／なし群で分散分析を行ったところ、有意傾向ではあったが有意差は認められなかった（F=3.308, p=.072）。従って前報（尾﨑，2004）同様、死別体験の有無と映像に対する関心の高さとの因果関係はなかった。

3．映像に対する関心の高さ、死別体験とPOMS値の変化量の関係

POMS値の変化量（映像提示後の値-同提示前の値）を従属変数とし、映像に対する関心度との相関分析、および死別体験あり／なし群での分散分析を行った。いずれの場合も有意差は認められず、これは前報の結果（尾﨑，2004）と一致している。さらに、関心の低い群（関心度5以下の21名）と関心の高い群（関心度10の25名）、死別体験あり／なし群での2要因の分散分析を行なったが、主効果、交互作用ともにすべてのPOMSの下位因子において非有意であった。

次に、死別体験あり群において、死別体験の数、および死別時期との関連を調べた。POMS値の変化量と死別体験1回のみ／2回以上群による分散分析、および死別時期との相関分析を行なったところ、いずれも「抑うつ－落込」の変化量において有意差が見られた。前者では、有意に2回以上群の変化量が小さく（t=2.250, p=.019）、後者では有意な負の相関が認められた（r=－.400, p=.001）。死別時期は、2回以上の死別者については最初の死別体験時期を尋ねた数値であるが、死別体験の回数と死別時期の有意差も認められた（t=3.269, p=.002）。当然ながら死別体験2回以上群の方が死別してからの年数が長かった（M_1=3.99, SD_1=3.04, $M_{2<}$=14.27, $SD_{2<}$=20.02）。そこで、死別体験1回のみ／2回以上群ごとに死別時期と「抑うつ－落込」の変化量との相関分析を行なったところ、死別体験1回のみ群では非有意で、2回以上群では有意な負の相関が認められた（r=－.407, p=.007）。これらの一連の結果から、「抑うつ－落込」に本質的に関連する要因は最初に死別してからの年数であると言える。

4．定量的感想の因子分析

「死に関する情報」が映像を通して視聴者に伝わったかどうかを確認する設問「人はいつか必ず死ぬということを改めて思った」の平均値は3.41、標準偏差は0.91で、歪度、尖度の絶対値はともに大きく、明らかな天井効果の分布状態を呈し、「死に関する情報」は視聴者に伝わったと考えられる。「見たくなかった」は、平均値0.80、標準偏差1.00で、分布状態から明らかな床効果が認められたので当設問は因子分析から外した。「生命の尊さを感じた」（M=3.01, SD=0.97）、「一日一日を大切に生きようと思った」（M=3.03, SD=1.05）は、いずれもM>3であったが、3を超える量が僅かであり、またヒストグラムから偏りは少ないと判断可能であったためこれらの設問は因子分析に供した。

最尤法、プロマックス回転による因子分析の結果、「何かいい感じだと思った」という項目が外され、当初想定したように3因子が得られた。第3因子に他人事と捉える設問「実感が湧かなかった」、「自分のこととしてとらえることができなかった」が所属したものの、当該因子所属項目はこれら2項目のみで、信頼性係数も低く（α=.51）、モデル全体の適合度もやや不満な点が残った（AGFI=.823, RMSEA=.051）ので、これらの項目を外し2因子として改めて分析を行なった。分析結果をTable3に示す。適合度、信頼性ともに高い因子モデルが得られた。第一因子は、これからの自分の人生をポジティブに捉えていこうとする設問項目が所属し、「人生前向き因子」と命名した。当該因子の平均は16.50点、標準偏差は4.47点であった。第2

因子は、ネガティブな感情を示す項目が所属し、「辛さ・悲しさの因子」と命名した。平均9.60点、標準偏差3.90点であった。因子間は中ぐらいの正の相関（r=.356）を呈した。以下、これらをまとめて「感想因子」と称する。

Table3　因子分析結果

	F1	F2
第1因子：人生前向き因子　α=.77		
12)これからの人生を一生懸命生きて行こうと思った	0.885	0.013
14)一日一日を大切に生きようと思った	0.800	-0.001
16)死に関する情報をこのように映像などを通して、提示していくことは、一般的に、良いことだと思った	0.528	0.074
15)人生や死に対する態度や考え方が変わると思った	0.515	0.237
08)死ぬときは、このように死にたいと思った	0.420	-0.179
10)生命の尊さを感じた	0.415	0.286
第2因子：辛さ・悲しさの因子　α=.80		
02)辛かった	-0.084	0.928
03)かわいそうだった	-0.133	0.788
11)がんは、こわいと思った	0.137	0.632
07)悲しかった	0.187	0.464

適合度：χ^2=19.598, p=.809, GFI=.962, AGFI=.919, CFI=1.000, IFI=1.022
RMSEA=.000
因子相関：r=.356

5．感想因子と関心、死別体験およびPOMS値変化量の関連

前節で得られた感想因子と映像に対する関心度の相関分析を行なったところ、人生前向き因子との間に有意で高い正の相関が得られた（r=.556, p<.001）。映像を見て人生前向きに捉えるほど映像に対する関心が高かったことを示す。また、感想因子を死別なし、1回だけあり、2回以上あり、の3群で一元配置分散分析を行なったが、群間に有意な差異は認められなかった。さらに死別体験あり（1回のみ、2回以上まとめて）群の死別時期と感想因子との相関分析を行なったところ、辛さ・悲しさの因子と中程度の有意な負の相関が認められた（r =−.359, p=.017）。最初の死別からの時期が長いほど、映像から感じ取る辛さ・悲しさが少ないことを示す。

次にPOMS値の変化量との相関分析を行なったところ、辛さ・悲しさの因子と「抑うつ−落込」の変化量との間に正の相関（r=.308, p=.007）、「活気」の変化量との間に負の相関（r =−.305, p=.007）が認められた。人生前向き因子との間には有意な相関は認められなかった。

6．自由記述感想

概して、映像プログラム中の人物の生き方を肯定的にとらえ、また、自分の人生を見つめな

おしたり、前向きに取り組んで行きたい旨の感想が多かった。また、登場人物の生き方や出来事を興味深い事実として認識しながらも、自分自身の振り返りには至っていない中立的な感想も散見された。極少数ながらも、「少し気分が悪かった、死ということが怖く感じる、良い風には見えない」といった対象者に心的負担をかけたと思われる記述もあった。

Ⅳ 考 察

1．POMS 値の変化とそれに関連する要因

本研究では、Table 1 に示すように、すべての POMS 値の下位因子、および総合値が有意に低下した。これまでの一連の報告においては、有意な変化を呈する下位因子も存在したが、すべての下位因子が有意な変化を呈したことはなく（尾崎，2001（n=22），2003（n=17），尾崎ら，2004（n=53））、本報告における対象者の人数による件出力の高さによるものであろう。また、検出力の高い本報においても、POMS 値の変化量と映像に対する関心、死別の有無の直接的な相関は見出せなかった。また、前報（尾崎ら，2004）では、映像に対する関心が低く、かつ、死別体験のない対象者は情動変化をきたさないのではないかと言う仮説を立てたが、対象者数が少なく、統計的な検定にかけるに至らなかったが、本報では十分ではないとはいえ、分散分析を行ない、非有意の結果を得た。これらのことから、当該映像提示による情動の変化は、映像に対する関心や死別体験の有無とは、直接的な関係がないと結論づけられる。

その一方で、死別体験あり群において、「抑うつ－落込」に本質的に関連する要因は、最初の死別からの経年数であることが、Ⅲ-3 節の検討でわかった。これは、最初の死別からの経年数が長いほど、「抑うつ－落込」の変化量が、（負数も含めて）小さいと言うことを示している。すなわち、経年数が長い人ほど、「抑うつ－落込」の値が低くなるということである。最初の死別から長年が過ぎ、その悲しみや辛さを乗り越え、人間的に成長し、かような映像を見せられたとしても自分にとって何か良いもの、糧となるもの、というような捉え方をするのであろうか。中高年層は本報告の対象者よりもはるかに長い経年数を過ごしている。本報告の対象者は変化を呈しているのに対し、最初の報告（尾崎，2001）において、中高年層の変化は認められないとした。したがって本報告では、本質的と思われる経年数の影響を、中高年層には拡張できないだろう。今後中高年の対象とした更なる調査が必要である。

2．感想因子とそれに関連する要因

これまで一連の研究から得られた自由記述感想から作成した設問を、リカートスケールで問い、因子分析を行なった結果、「人生前向き因子」と「辛さ・悲しさの因子」の 2 因子が得られた。これら、2 因子は、正の相関を呈している。これは、当該映像を見て、辛かった、悲しかった、と打ちひしがれてしまうのではなく、辛く、悲しい事実ではあるが、それを受け止めて前向きに生きていこう、とする対象者の姿勢が窺い知れる。逆に、映像を見て、辛くも悲しくも感じなかった場合は、今後の人生に対してもあまり前向きに取り組もうと言う意志は生じにくいということを示している。

「人生前向き因子」と映像に対する関心の高さと正の相関が得られた。しかし、人生前向きに生きる意志が生じたので、映像に対する関心が高い、と評価したのか、映像に高い関心を持つことができた結果、前向きに行こうと思ったのか、という因果関係は本研究では不明である。また、死別体験あり群において、「辛さ・悲しさの因子」と最初の死別からの経年数との負の

相関が得られた。これは、既に遠い昔に経験済みのことであり、慣れてしまって映像から受けるインパクトが少ないということであろうと考えられる。

POMS 変化量と、これら感想因子との関連を見れば、「辛さ・悲しさの因子」と、「抑うつ－落込」の変化量との間に正の相関、「活気」の変化量との間に負の相関が見られた。これは、辛く悲しく思った人ほど、「抑うつ－落込」が減少しにくい、あるいは増加しやすいということであり、また、「活気」が低下しやすいということを示唆するものと考えられる。

3. デス・エデュケーション教材としての当該映像

デス・エデュケーションは、「死」を通して、命の尊さやかけがえのなさを考えるきっかけを与えるものである。「死を通して」というのは、より直接的、具体的には、たとえば、命あるものは、あるいは我々人間は誰しもいつか必ず死ぬということを自覚する、ということでもあろう。そのような観点から当該映像を評価すれば、「人はいつか必ず死ぬということを改めて思った」という設問に対し、有効回答者の9割近くが「あてはまる」、「どちらかといえばあてはまる」に回答したことは、当該映像を通して、死に関する情報が十分に対象者に伝わったと考えられる。そして、映像を見た対象者はその情動に有意な変化をきたした。このことは、少なくとも今後の態度変容の必要条件を満たしたということである。

また、当該映像は人の死をテーマに取り上げたものであるから、悲しい、辛いという感情が起こることは自然なことであろう。だが、幸いなことに悲しい、辛いという感情「辛さ・悲しさの因子」と「人生前向き因子」は、正の相関を呈した。これは特筆すべきことで、ただ単に悲しい映像を見せられて悲しみに打ちひしがれる、あるいは浸るだけでなく、自分の人生に対して前向きに取り組もうとする意志が生じることであり、デス・エデュケーションの目的に適った映像であると言えるだろう。ただし、少数ながらもこのような映像を負担に感じる対象者も僅かながらも存在したことが、自由記述の感想から見て取れた。試行を行なうに当たって十分な説明と同意が必要である。また、本報告を含め一連の研究は、ほとんどの対象者が専門学校生など青年層であり、幅広い年齢層に適用するためには、年齢層を広げた調査が必要である。

V 結 言

いわゆる“good death”を描いたドキュメンタリーを専門学校生に提示し、以下の結果が得られた。1）POMS 下位因子すべてが有意に低下し、その変化量は映像に対する関心、死別の有無には関連しなかった。2）POMS の下位因子「抑うつ－落込」の変化量は、死別体験のある対象者において最初の死別からの経年数に関連していた。3）映像を見ての感想から、「人生前向き因子」と「辛さ・悲しさの因子」の 2 因子が抽出され、それらは正の相関を呈した。4）「人生前向き因子」と映像に対する関心が正の相関を、「辛さ・悲しさの因子」と POMS 下位尺度の「抑うつ－落込」の変化量が正の相関を、および、「活気」の変化量が負の相関を示した。

これらの結果から、映像提示型のデス・エデュケーションに関する議論の基盤となるようなデータを蓄積するという本研究の目的のひとつは、少なくとも対象者近傍の年齢層については、達成されたといえる。そして、情動変化に関連する要因を探索するという目的、および映像から受ける印象と対象者特性または情動変化との関連を見ていくという目的に対しては、その一部が達成されたものの、「抑うつ-落込」、および「活気」以外に関連する要因は見出すことが

できなかった。

そして、当該映像を、将来的な態度変容を目的としたデス・エデュケーションの教材として用いる場合、以下の理由からその目的に適うものであるといえる。ひとつには、態度変容の前提条件となる情動変化が認められたこと、もうひとつには、悲しさ・つらさを感じながらも、人生前向きに生きようとする傾向が見受けられたことである。但し、対象となる視聴者に対しては事前の十分な説明と同意が必要である。

引用文献

赤澤正人 2004　デス・エデュケーションの学校現場における展開～実践経験を持つ教師を対象とした半構造化面接の結果から～2003年度大阪大学大学院人間科学研究科修士論文

Bandura, A., Ross, D., & Ross, S. A. 1963 Vicarious reinforcement and imitative learning. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 67, 601-607.

Bell, W. D. 1975 The experimental manipulation of death attitudes: A primary investigation. *Omega*, 35, 199-205.

Berkowits, L., & Alioto, J. 1973 The meaning of an observed event as a determinant of its aggressive consequences. *Journal of Personality and Social Psychology*, 69, 950-960.

Berman, D. J. 1998-99 Attitude toward aging and death anxiety : Aging and death class. *Omega*, 38, 59-64.

Bushman, B., & Green, R. 1990 Role of cognitive-emotional mediations and individual differences in the effects of media violence on aggression. *Personality and Social Psychology*, 58, 156-163.

Combs, D. C. 1981 The effect of selected death education curriculum model on death anxiety and death acceptance. *Death Education*, 5, 75-81.

デーケン, A　1986　死への準備教育第1巻　死を教える　メヂカルフレンド社.

Durlak, J. A. 1978 Comparison between experiential and didactic methods of death education. *Omega*, 9, 57-66.

Green, R. G., & Stoner, D. 1973 Context effects in observed violence. *Journal of Personality and Social Psychology*, 25, 140-150.

Hartman, D. 1969 Influence of symbolically modeled instrumental aggression and pain cues on aggression. *Journal of Personality and Social Psychology*, 11, 280-288

Hayslip, B, Jr. & Cynthia, P. G. 1993-94 Effects of death education on conscious and unconscious death anxiety. *Omega*, 28, 101-111.

平山正実　1985　生と死の教育ーとくに生涯教育の中で　樋口和彦・平山正実（編）「生と死の教育ーデス・エデュケーションのすすめ」　創元社, Pp 144-169.

Huston-Stein, A., Fox, A., Greer, D., Watkins, B. A., & Whitaker, J. 1981 The effects of action and violence in television programs on the social behavior and imaginative play of preschool children. *Journal of Genetic Psychology*, 138, 183-191.

Jo, E., & Berkowits, L. 1994 A priming effect analysis of media influence : An update. In J. Bryant & D. Zillmann (Eds.) , Media effects : Advances in theory and research.

Hillsdale, NJ : Lawrence Erlbaum Associates. pp.43-60.
Johansson, N. & Lally, T. 1990 Effectiveness of a death education program in reducing death of nursing students. *Omega*, 22, 25-33.
Kano, Y., & Harada, A. 2000 Stepwise variable selection in factor analysis. *Psychometrica*, 65, 7-22.
柏木哲夫 2001 ターミナルケアとホスピス 大阪大学出版会.
木村正治 1990 大学生を対象にした「死の教育」(Death Education) の実践とその評価. 学校保健研究, 32, 443-450.
Miles, M. S. 1980 The effect of a course on death and grief on nurse's attitudes toward dying patients and death. *Death Education*, 4, 245-260.
尾崎勝彦 2001 死の不安およびその他の情動に及ぼす「死に関する」情報の影響 臨床死生学年報, 6, 29-38.
尾崎勝彦 2003 「死に関する情報」を含む映像による情動変化ー映像に対する関心を中心としてー 臨床死生学年報, 8, 65-74.
尾崎勝彦・荒井龍淳 2004 死に関する情報を含む映像が青年の情動変化に及ぼす影響ー映像に対する関心の高さ、死別体験の影響ー 生老病死の行動科学, 9, 3-13.
SPSS Inc. 1999 SPSS Base 9.0J user's guide. SPSS Inc.
Whitty, M. T. 2003 Coping and defending: age differences in maturity of defense mechanisms and coping strategies. *Aging and Mental Health*, 7(2) , 123-132.
Wittmaier, B. C. 1979 Some unexcused attitudinal consequences of a short course on death. *Omega*, 10, 271-275.
横山和仁・荒記俊一 2000日本版POMS手引き, 東京：金子書房
吉田富二雄・湯川進太郎 1996 暴力映像が視聴者の感情・認知・生理反応に及ぼす影響 (1) ー映像の分類：暴力性と娯楽性の観点からー 日本社会心理学会第37回大会論文集, 368-369.
湯川進太郎・吉田富二雄 1998 暴力映像が視聴者の感情・認知・生理反応に及ぼす影響 心理学研究, 69, 89-96.